



早稲田大学国分寺校友会この1年 (昭和53年6月3日～54年6月2日)

- ☒ 昭和53年6月3日。第6回総会を国分寺パークレーンに於いて開催。参会者。来賓、近隣校友会代表等を含めて50名。特別講演は仁戸田 六三郎早大名誉教授の『早稲田大学百年に憶う』

(詳細は会報No. 8に掲載)
- ☒ 昭和53年12月2日。53年度忘年会を国分寺駅南口、割烹『川むら』に於いて開催。

(報告。2頁に掲載)
- ☒ 昭和54年1月19日。54年度『新春の集い』を国分寺パークレーンに於いて開催。美貌の占い師として国際的にも有名な三枝 千誉女史を招き、お話を聞き、同時に出席者全員の将来を占ってもらう。

(報告。3～4頁に掲載)
- ☒ 昭和54年2月8日。 当会顧問 村山 公三氏逝去される。

4月20日。ご遺族 道子未亡人、ご長男創太郎氏をお招きし、東洋経済新報社社長 中井義行氏を交えて『故村山 公三先生をしのぶ会』を開く。

(報告。5～6頁に掲載)
- ☒ 昭和54年6月2日。第7回総会 於国分寺パークレーン

午後4時30分 早稲田大学国分寺校友会第7回総会

5時 特別講演

『早稲田の育んだもの』 高木 純一先生 (工博・早大名誉教授)

6時～9時 パーティー

昭和53年度

忘年会

昭和53年度。忘年会を国分寺駅南口の料亭「川むら」において開催しました。出席者30名。

忘年会は、すでに恒例となった福引とオークションに趣向をこらし、出席者各位が年（年令十暦年）を忘れて大いに賑わいました。

福引については、農協の理事長でもある中藤会長にあやかるとため、国分寺産の農産物を景品といたしました。一等は特選米五キロ。二等はもち米二キロ（これ等は国分寺産ではありません）以下、里いも二キロ、白菜三個、大根三本、ねぎ一キロ、ほーれ



↑ 福引1等を当てた堀田氏



⇒ 福引5等の高橋氏

オークション ↓



ん草五束がそれぞれ全員に渡りました。そのためでしょうか、二次会に流れる方々もなく、奥様連に大いに好評であったようです。

オークションは会員思いの知恵をしばって出品され、お勤め先の物品、出身地の特産、奥様の手造り品等々、高橋均氏はわざわざ大学まで出向いて早稲田ライターを出品して下さいましたが、やはり不況の影響でしょうか、値が張らず市価の半額以下が多く、出品者に申し訳なく思いましたが五八、一〇〇円の収入が校友会の基金に加えられました。

オークション出品物一例。手編みのポンチヨ、ササキガラス製豪華華卓上時計、ゴマ附ごますり器、他約三〇点。

昭和54年度『新春の集い』

講師 三枝 千誉女史



(三枝 千誉女史の講話の概要)

私は昨年、百十二年の伝統を受け継ぐ意味で、生れ育った銀座の地に喫茶店を開きまして、一杯二百五十円のコーヒーのお客様に「いらっしやませ」「ありがとうございます」を心から申しております。

私が常々心掛けておりますことは、日本の女性は「古くて、新しいもの」でなければいけないということ。古くさいものでもいけなければ、新らしがりやだけでもいけない。日本の婦道の中には古く、良いものが多く培われており、これを生かす新しくこれを表現すべきであると感じておるので、古い習慣の礼儀の中に生きながらこの良いものの本質を外国人に対してでも英語で自由に表現できるようにと考えております。

三十いくつのライセンスを持っておると申しまして、これは私の勉強を陰で助けて下さった母のおかげでございまして、母に深く感謝しておりますことは申すまでもございませぬ。その母が、一昨年大病を患いまして、私はその看病に疲れたためでしょうが、眼を患いました。ほとんど失明し医師にも見放されるほどでございました。

そこで私は若し失明した場合でも、自分のためばかりではなく、他人のためにもなるような人になりたいと考えまして、私の先生でありました京都女子大の憲法学の教授をいたしてあります齋藤長太郎先生が、ご趣味で易学をやっていたら、先生は、君の先生にご相談申しましたら、先生は、君の眼はかならず直るとおっしゃって下さいました。その後医師達も奇蹟だと申すほどに良くなりました。そこでそこで先生の易学に本格的に取り組みました。始めはテープで勉強しておりましたが、入院している病院の先生方や、武蔵野新聞の社長さん方の

ご厚意によるお協力を頂きまして、直接先生のお教えを受けられるようにもなり、文部省の認可も頂きまして、こうして他人さまの易を見る事が出来るようになりました。

私の初恋の人は早稲田大学の方でございまして、今日はこうして早稲田の皆様と一諸にならせて頂き、皆様にこれ以上お幸せになつて頂きたいと思ひまして二枚の紙をおくばり致しました。一枚には東洋で古くから行われやす易に基いた運星を、そしてもう一枚は西洋の占星術に基きました易を見たいと存じます。占星術の方は皆様の御名前と生年月日をお書き頂き、後日梅田様までお送りいたします。

当るも八卦、当らぬも八卦と申しますがおなぐさみと存じまして皆様の前途を占わせて頂きます。

(占いの一部を紹介します)

一白の方(明33、明42、大7、昭2、昭11、昭20、昭29年)の今年の運勢は。

幸福をつかむ時期は毎年こない、今年と来年は、限りある力を試さんという年です。ただし、ご注意頂きたいのは怪我や風邪に對しては最大の注意をして頂くということ、今年中にこの星の方は秘密のばれる年でございましてからくれぐれもご注意下さい。ただし、占いと申すものは、一白の方の一般的に注意すべきことを見ていますので、各人で相違はありますが、この星の人は概してこういう運命にあるということなのです。各個人の方での相違はご希望があれば別にくわしく拝見いたします。

それでは一白の方の今年の各月の運勢を申し上げますので、一白の方だけご自分の紙にご記入下さい。

(三枝 千誉女史紹介)

三枝 千誉女史は、皆様ご存知の銀座の老舗 洋品店サエグサのお嬢さんとして生れ、初代ミス銀座に選ばれ、財力と美貌に恵まれた方ですが、生れついでの研究心と、何にでも挑戦するという闘志で日本舞踊、ダンス教師、茶道、書道、華道を始め、料理、栄養士、鍼、マッサージ、看護婦、は

ては英語通訳、ホテルマネージメント、パ

ーテンドー、宅地建物取引、危険物取扱に至るまで三十五のライセンスを持つスーパーウーマンで、特に近代のコンピニーターを駆使しての易学においては第一人者であり、日本易学連合会特別会員、全日本運命学会会員であります。

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	来年	今年
○	×怪我、風邪に注意。	○争いごとがあり注意。争いごととは出来るだけ避ける。	◎家庭の喜びで何か良いことで変わったことが出てくる。	○浮気心が出て来て秘密がばれる月です。	×注意をする月、何か手を出したいことにも自重する。	○悪くはないが迷いごとがでてくる。	◎最高の運勢。	○怪我に注意。	○良い方に向い忙しくなる。その忙しさを喜んでやる。	×悩みごとがある。	×争いごとがある。秘密がばれる。	◎	◎

おなまえ NAME	生年月日 BIRTHDAY	幸運の番号 LUCKY NUMBER	幸運の月 LUCKY MONTH	幸運の色 LUCKY COLOUR	幸運の方位 LUCKY DIRECTION
	大正7年9月19日	3, 5, 8 14, 50, 23	4月 6月 3月 6月 9月	白ブルー グリーン 黄	東南

The International Mark of Quality
CASIO

〒188 東京都田舎町3-15-10
電話0424 (65) 7200
3-15-10 chome, Minami-cho, Tanashi-chi,
Tokyo, Japan 188
Telephone: 0424 (65) 7200

花 ヒヤリス ライオン
石 オードンファクス、エナリ
作 永



三枝千景
Chiyu Saegusa

◎ 会報8号まで、毎号のように原稿を頂いた。頂いたと申すよりは、無理にお書き願った村山公三顧問の原稿が、こんな形で最後になられるとは本当に信じられません。昨年十二月のワセダ・サロンで、私と安食氏とが、サロン代表としてお見舞に上った時は、お顔色は少々黄ばんでおられました。お元気で、ベッドの枠に紐で赤エンピツをつるして、枕もとの本に書き込みをなさっていたお姿が末だに目に焼きついています。これからは会報の原稿に苦勞するのではないかと思います。何か暗然と致しますが、諸兄姉には、母校を愛し、真理を究めんとする先輩をしのんで、この会報へのご投稿を切にお願い申し上げます。

◎ 四月二十日の「故村山公三先生をしのぶ会」に御出席頂きました。道子未亡人、御長男削太郎氏より、本会の発展のためと金一封を贈られました。より良い会とするため、会長始め諸幹事も大いに努力致したいと存じます。

◎ 村山先生の最後のお言葉でもある「国際間の穢い言葉で消されている。日本のだれもが大声で消し合っているのは非常に残念だ。日本の損失だ。高いところを見ているから……」私はこのお言葉を、先生のお人柄から考えて、私利、私慾を捨てて、協調の中に世界の文化と人類の発展のために各個人は尽すべきであり、国連や各国の指導者が、口に美辞麗句を唱えても、裏で猜疑と陰謀が渦巻いていることに対する警告でもあり日本もその縮小版にすぎないといういましめでもありましよう。経済の真の意味は「一國の富」ではなく、全人類が平等に、生きる権利を主張できることの手段であると先生はお考えになっておられるのではないかと思います。

◎ 三枝千景女士の講演はテープがありますので例示しました。白以外の方の二黒、三碧、四緑、五黄、六白、七赤、八白、九紫の方も、若しご希望がありますれば聞くことができます。但し、西洋占西術の方は直接三枝女士に占って頂くより仕方がありません。梅田幹事長にご斡旋頂ければ良いと存じます。(須田)

◎ 五十四年度会費、お払込み頂けます方は左記にお振込み下さい。
五十四年度校友会 年会費千五百円
郵便振替口座 口座番号
東京・一八八七五五
第一勧銀国分寺支店・普通預金口座
二七五・一三二五一八八
多摩中央信用金庫・普通預金口座
〇一・三六二〇六一四
早大国分寺校友会 梅田浩正

早稲田大学国分寺校友会・会報
昭和五十四年六月二日 発行
発行 早稲田大学国分寺校友会
国分寺市東元町1-38-24
梅田浩正方
電話 〇四二三 (二三) 三八八四
編集 広報部 須田 茂雄
黒川 清知

早稲田大学国分寺校友会顧問 故村山公三先生をしのぶ



末を心に懸け、熱い思いを持ち続けられました。

先生の御長男村山創太郎氏の先生入院中の覚書を載せて、亡き村山公三先生をしのびたいと思います。

☆ ☆ ☆
昭和五十三年十一月十七日
立川市の立川共済病院六一八号室に入院。

十一月十八日
初めて見舞に行く。顔色やや黄色だがすこぶる元気で安心す。ベッドの棚には新聞、雑誌、赤鉛筆。窓際には本が数冊並べてあり、「小さな書齋」となっている。

十一月二十五日
黄胆除去の薬を飲み始める。入院は長期となるかも知れぬとのこと。病床日記には短歌が綴られている。

日は昇る 活気あふれる大都会
退院まではあと幾日ぞ

病棟はただ深々と月冴えて
寝息きかすかにもれ静まれり

志賀直哉トルストイなど読みふけり
フト病床の我れを忘れつ

黄胆はなかなか引かない。病床で年賀状を書けず、母や妻順子が代筆する。

「正月来い」指折りかぞう子らのこと
病床の人みな退院を待ちわびて
おり

入院三十二日目の十二月十八日、手術が必要となる。父は元気である。

十二月三十日
家族三人で手術しない事を決め、本人に伝

えると、「自分もそう思う」と喜び、安心する。

昭和五十四年一月二日
家族全員病院に集まり、写真を撮ったり談笑する。孫が可愛くてしょうがないようだ

点滴、薬、注射、胃カメラ……
「先生、看護婦さん達は大変親切にしてくる」と感謝。

一月十一日
昨夜の検査で疲れたのが、日記、新聞整理をする気力がなくなる。病床日記の字体かなり乱れてくる。

病床の母子の会話隣して
亡き母しのぶ古稀すぎしいま
ねむられぬ夜ねむらんとどじる目に
行方わからぬ涙にじむも

一月二十四日
病室六〇九号室に移る。四人部屋だが患者は三人。この日から母と姉が交替で二十四時間の看護に付く。病床日記には大便の色小便の量、体温、お見舞に来て下さった方の名前だけとなる。

一月二十六日
あと二週間と宣告される。ガンは一步一步父の体を蝕んでいる。

一月三十日
胆汁を外に出す検査成功する。しかし出が悪い。三十七度以上の熱が続き、腹水がたまり苦しうである。

二月七日
あと七、十日と言われる。

二月八日
深夜泊りの姉から電話でたたき起こされる「出血して危険」。顔色が土色となり苦しそ

(次頁へ続く)

私たちが早稲田大学国分寺校友会の発足にご尽力を頂き、七年間近くを顧問として、会の発展のため力を尽くされ、また、毎月第三金曜日のワセダ・サロンには必ずご出席下さり、日本経済の分析、世界経済の見通し等後輩の面倒を見て下さった村山公三先生は去る二月八日、胆道ガンのため、東京・立川共済病院で逝去されました。享年七十一才でした。

二月十一日、東京・国分寺市西町のけやき台団地集会所で密葬が営まれ、本葬は二月二十一日午後一時から東京・新宿区南元町の千日谷会堂で、各界著名人、一般会葬者など多数が参列して、しめやかなうちに営まれました。

故村山公三先生は、明治四十年十一月二

十二月、新潟県柏崎市に生まれ、大正十五年四月、第一早稲田高等学院に入学し、昭和七年、早稲田大学商学部を卒業して、東洋経済新報社に入社。以来、一貫して編集畑を歩み、海外部長、一般経済部長、企画部長を歴任しました。昭和二十二年取締役その後、論説委員、常務取締役関西支社長東経社社長を経て、昭和四十四年三月、代表取締役専務となり、四十五年十一月、代表取締役社長に就任。昭和四十七年十一月退任後、四十九年十一月迄、相談役。その後、財団法人石橋湛山記念財団事務局顧問。四十五年六月、母校早稲田大学の商議員。また、昭和四十年九月からは、近畿大学監事に就任されていきました。

故村山公三先生は、最後まで、日本の行

父・村山公三

村山 創太郎

父は自分の好きな道を精一杯生きて大変幸せでした。東洋経済新報に入社した時の喜びは子供の様だったという事です。そして生涯の師であった石橋湛山先生の下で勉強し、人生を学び、それを礎に一直線に、我が道を行くと思えます。

石橋先生が総理大臣となったのは父が関西支社長の時代でした。我が事のように喜んでいましたが、残念なことに御病氣となり

「故村山公三先生をしのぶ会」

しのぶ会

司会 須田広報幹事

一、黙禱

一、開会のことば

一、挨拶
板橋副会長
中藤 会長
来賓 東洋経済新報社社長

村山家

中井義行氏
道子未亡人
御長男 創太郎氏
梅田幹事長

一、閉会のことば

会員出席者 二十名

昭和五十四年四月二十日、国分寺パークレイン会議室において、本会顧問 村山公三先生をしのぶ会を開催致しました。道子未亡人、長男創太郎氏が故人のお写真をお持ち下さり、現東洋経済新報社社長 中井義行氏が村山前社長と東洋経済新報社の歴史とお話し下さいました。

東洋経済新報社は明治二十八年十一月に町田忠治によって起され、一年後町田忠治

あの有名な辞任となってしまいました。あの時、父は、「男」の出処進退について何かを感じ取ったようです。

父と本は常に一心同体でした。赤エンピツもです。出征する時に、母に「戦死したら、古本屋で食べて呉れ」と言ったそうです。母は時々、子供には「本を買わずと土地でも買っておいでなければ……」と申しますが、「君はこんなに本を読む人間ではない」と思って結婚したんだから今さらなんだ」と言って笑ったものです。代官山時代（私達一家は国分寺市に住む前は渋谷区の代官山に住んでおりました）、地震があると、真っ先に本箱を一斉に押えた

のも今は懐かしい思い出となりました。父は晩年、詩吟、日本舞踊を習っていました。青年時代は演劇に熱中していたようです。築地小劇場には大分通っていたようで、田舎（新潟県柏崎市）に帰ると、村の人達と「どん底」を一人七役で演じるという面も持っていました。

（前頁より）

う。寒さを訴え、体の震えが止まらない。午前七時頃、出血止まる。どうしたのだから？ 血圧も徐々に回復。しかし多量の出血で、あと二、三日と言われる。姉と一たん帰宅して夜に備える。午後三時すぎ、母

が辞めるについて大隈老侯に相談し後任に天野為之を推し、十年間主幹として運営した。石橋湛山は明治四十四年に入社し、やがて五代目の社長として東洋経済の地盤を確固たるものとした。こうして日本最古の経済誌は、早稲田の伝統を受け継いだような型で現在に至っている。

村山先生は石橋湛山に深く傾倒し、「石橋湛山全集」を発刊した。村山先生に対するニックネームは「瞬間湯沸器」といわれ一本気で曲ったことや、あいまいなことをゆるさなかった。

先生はお家庭にあつては常に読書と、経済の変動に対する洞察に気を用られ、ために、一般サラリーマン家庭のような家庭団らんということはあまりなかったようである。昨年二回に亘って奥様とご一緒にヨーロッパを旅行なさったことを病床で喜んでおられたとか。若し、健康を回復されたら今度は家庭的な良き父、良き夫となられたであろうと残念に思います。

最後に先生のお写真に向かって校歌を合唱して先生とのお別れを致しました。



より電話あり、病院に急ぐ。午後四時七分、亡くなる。病名、胆道ガンを、享年七十一才。病床ノート(3)になるはずだった新しいノートには、最後の言葉が姉の手で書かれていた。

「国際間の中に広がる美しい言葉は、国際間の織い言葉で消されている。日本のだれもが大声で消し合っているのは非常に残念だ。日本の損失だ。高いところを見ているから……」

